

# 麻畑の一夜

岡本綺堂

青空文庫



A君は語る。

友人の高谷君は南洋視察から新しく帰つて来た。日本でこのごろ流行する麻つなぎの内職に用いる麻は内地産でない。九分通りはマニラ麻である。フィリピン群島に産する麻のたぐいはすべてマニラ麻の名をもつて世界に輸出されている。高谷君が南洋へ渡航したのも、この製麻事業に關係した用向きで、もつぱらこの方面の視察にふた月あまりを費して来たのであつた。

フィリピン群島にはたくさんの小さい島があるので、高谷君も一々にその名を記憶していないが、なんでもソルゴという島に近い土地であるといつた。高谷君が元もと船ふねからボートをおろして、その島の口へ漕ぎつけたのはもう九月の末の午後であつたが、秋をしらない南洋の真昼の日は、眼がくらむように暑かつた。藍あゐのような海の水も島へ近づくにしがつて、まるでコーヒーのような色に濁っているのは、島のなかに大きな河があつて、そ

の下流が海にむかつて赤黒い泥水を絶え間なしに噴き出しているからであつた。高谷君はひとりで大胆にその河口へ乗り込んで、青い草の繁つた堤とてから上陸しようとしたが、河の勢いがなかなか烈しいので、ややもすれば海の方へ押戻されて、彼もほとほと困つてゐると、堤のうえに一人の男があらわれた。男は白いシャツを着て、茸きのこのような形をした大きい麦わら帽子をかぶつてゐた。

「さあ、投げますよ。」と、男は明快な日本語で叫んだ。そうして、こっちの舟を目がけて長い麻縄を投げてくれた。無論、一度ではうまく届かなかつたが、二度も三度も根よく投げるうちに、縄のはしは首尾よく舟のなかへ落ちた。高谷君はさらにそれを船端ふなばたへくくり付けて、一種の曳き舟のようにして堤のきわまで曳きよせてもらった。

「気をつけてください。流されますから。」と、男はまた注意した。

高谷君はその縄の端を立木の根へしっかりと縛りつけて、初めて堤の上に登つた。

「よくお出でになりましたね。」と、男は笑いながら挨拶した。かれは三十ぐらいの、体格の逞ましい、元氣のよさそうな男であつた。

高谷君は自分の身分と目的とを説明すると、男は愉快らしくまた笑つた。

「さようですか。まあ、こちらへいらつしやい。この島にはそうたくさんもありませんが、

それでも相当に麻畑があります。わたしがすぐに御案内します。わたしは丸山俊吉という者です。」

かれは日本人で、三年ほど前からこつちへ来て、日本人と原住民とを合せて七十人ばかりの労働者の監督をしていると言った。高谷君は彼のあとについて堤から十町ほど行くと、広い麻畑が眼の前にひろがって、芭蕉ばしょうに似た大きい葉が西南の風になびいていた。丸山はその一年の産額や品質などをいちいち詳しく説明してくれた。

「まあ、我れわれの小屋へいらつしやい。お茶でもいれますから。」

それからまた二町ほども行くと、そこに大きい家があった。屋根はトタンでふいて、三方は日本風の板羽目になっていたが、そのひどく破損しているのが高谷君の眼についた。案内されて内へはいると、中は一面の土間になっていて、部屋の隅には寝台と毛布がみえた。棚の上には酒の壺びんや缶詰のたぐいも乗せてあった。ふたりはまん中に据えてある丸いテーブルを囲んで、粗末な椅子に腰をおろした。

「おい、勇造、お客様だ。早く来い。」

丸山に呼ばれて、ひとりの青年が外からはいつて来た。年のころは十八、九で、これもこういう南洋生活をしているにふさわしい、見るから頑丈らしい男であった。かれは茶っ

ぼい縮ちぢみのシャツを着て、麻のズボンをはいていた。

天草あまくさの生れで、弥坂勇造という男であると、丸山はこれを高谷君に紹介した。勇造は丸山のボーイ代りに働いているらしく、かいがいしく立廻つて、チョコレートやビスケットなどを運んで来た。マニラ煙草も持つて来た。

「なにしろ、よくお出でくださつた。」と、丸山はいかにも打解けたように言った。「内地の人も随分こつちへ来るようですけども、大抵はおもな島々をひと廻りするだけで、こんなところまでは滅多めったに廻つて来る人はありません。毎日おなじ人の顔ばかり見ているんですから、まったく内地の人はお懐かしいんですよ。」

実際、かれらは高谷君を歓迎しているらしく、大切にしまつてあつたらしい葡萄酒の口をぬいて高谷君にすすめた。缶詰の肉や魚なども皿に盛つて出した。ここの島の住んでいる人としては、出来るかぎりの歓待を尽くされて、高谷君も気の毒になつて来た。はじめの予定ではほんの一時間ぐらい見廻つてすぐに帰るつもりであつたが、あまりに人なつかしく持成もてなされるので、高谷君も早くは起たてなくなつて、いろいろの話に二時間あまりを費してしまつた。そのうちに丸山はこんなことを言い出した。

「この頃はここちらに可怪おかしなことが始まりましてね。労働者がみんな逃げ腰になつて困るん

ですよ。」

「おかしなこと……。どんなことが始まったんです。」

「人間がなくなるんです。先月からもう五人ばかり行くえ不明になりました。」と、丸山は顔をしかめながら話した。

「どうしたんでしょう。」

「判りません。なんでも四、五年前にもそんなことが続いたので、今までここに在住していたオランダ人はみんな立退たちいてしまつて、しばらく無人島のようになつていた所へ、我れわれが三年まえから移つて来て、今まで無事に事業をつづけていたんです。勿論、来た当座は十分に警戒していましたが、別に変つたこともないので、みんなも安心していました。原住民たちも一時は隣の島へ立退いていたんですが、これもだんだんに戻つて来て、今ではこうして我れわれと一緒に働いています。ところが、先月の末、二十五日の晩でした。この小屋の近所に住んでいる原住民の女が突然に行くえ不明になつたんです。どこへ行つたのか判りません。結局は河縁かわべりへ水を汲みに行つて、滑り落ちて海の方へ押流されて、鱻ふかにでも食われたんだらうという事になつてしまいました。するとそれから三日ばかり経つて、またひとりの原住民が見えなくなつたんです。こうなると、騒ぎがいよいよ大

きくなつて、これはどうも唯事ではない。むかしの禍わざわいがまた繰返されるのではないかという恐怖に襲われて、気の弱い、迷信の強い原住民たちはそろそろ逃げ支度に取りかかるのを、わたくしが無理におさえて、まあ五、六日は無事に済んだのですが、今月にはいつて四日ほど経つと、またひとりの原住民が見えなくなる。つづいて二日目にまた一人、都合四人も消えてなくなつたんですから、わたしも実に驚きました。まして原住民たちも生きている空もないようにふるえあがつて、仕事もろくろく手につかないという始末で、わたしも弱り切つていますと、いい塩梅あんばいに小半月こばかりは何事もないので、少し安心する間もなく、六日前にまた一人、今度は日本人が行くえ不明になつたんです。」

「日本人が……。やっぱり夜のうちに見えなくなつたんですか。」と、高谷君は眉まゆをよせながら訊きいた。

「そうです。いつでも夜なかから夜明けまでのうちに見えなくなるんです。今までは原住民に限られていたんですが、今度は日本人の方へもお鉢おちが廻まわつて来たので、みんなはいよいよ騒さわぎ出して、どうしても此こ処こにはいられないというんです。しかし折角しやくかくこれまで経営した仕事を今さら中途で放棄するのも残念ですから、私もいろいろに理解を加えて、まあ当分は踏みとどまつていることにしたんですが、怖おそくつてここには寝ねられないというので、



急に隣りの小さい島へ小屋掛けをして、日が暮れるとみなそこへ行って寝ることにして、夜があけるとこつちへ出て来るんです。実に不便で困るんですが、さし当りはそうするよりほかにないんです。お察しください。」

丸山もよほど困っているらしく、その男らしい太い眉をくもらせて話した。高谷君も息をのみ込んでこの不思議な話を聞いていた。

「で、その行くえ不明になった人間というのは、その後になんの手がかりもないんですか。」

「ありません。」と、丸山はすぐに頭かぶりをふった。「無論に手分けをしていろいろに穿せん索さくしたんですけど、影も形もみえません。なにか猛獣でも襲って来るのか、あるいは山奥から我れわれの知らない野蛮人でも忍んで来るのかとも思っただんですが、死骸も残っていない。骨も残っていない。血のあとも残っていないのですから、一体どうしたのかちつとも見当が付きません。丁度あなたがお出でになったのを幸いに、あなたの御意見をうかがいたいと思うんですが……。どうでしょう、世間にこんなことがあるでしょうか。」

「さあ。」と、高谷君も首をかしげた。「行くえ不明になった人間はひとり寝ていたんですか。それとも誰かそのそばに寝ていたんですか。」

「いや、それがまた不思議なんです。ひとりで寝ていたのなら、まだしもの事ですけど、日本人は大抵七、八人ずつ一軒の小屋に枕をならべて寝ているんです。まして原住民は十人も二十人も土間にアンペラを敷いて、一緒にかたまつて転寝てんねをしているんですから、かりに猛獣が来ても、野蛮人が来ても、ほかの者に覚さられないようにそつと一人をさらつて行くということは、よほど困難の仕事で、誰か気のつく者がある筈はずです。ねえ、そうじゃありませんか。しかし人間が理屈なしに消えてなくなる訳のものでありませんから、私はまずこれを猿の仕業しわざと鑑定しました。」

「ごもつともです。」

「あなたも御同感ですか。」

「私もそれよりほかに考えはありません。さつきからお話を聞いているうちに、私はドイツの小説を思い出しました。」

「はあ、それはどんなことです。」と、丸山はテーブルの上に肱ひじを押出した。

隅の方の椅子によりかかっている勇造も、眼をかがやかして聞き澄ましていた。

「無論に作り話でしょうが、ドイルの小説にはこういうことが書いてあるんです。大西洋のある島の耕作地でやはり人間が紛失する。骨も残らない、血のあともない。よく詮議せんぎしてみると、結局それは大きい黒猩しやうじやう々の仕業であつたというのです。」と、高谷君は説明した。「今度の事件も余ほどよく似ているようですから、あるいはドイルの小説が事実となつて、我れわれの見たこともないような奇怪な猿のたぐいが、夜なかにこの小屋へおそつて来て、そつと人間を攫さらつて行くんじやありませんかしら。」

「なるほど。」と、丸山もうなずいた。「そこらが好い御鑑定です。ただし腑に落ちないのは、もしそんな怪物が来て人間を引つ担いで行くとしたら、なにか声でも立てそうなものだと思うんですが……。すこしでも声を立てれば、そばに寝ている者のうちで誰か眼をさます者もある筈ですが……。」

「ドイルの小説によると、その猿は恐ろしい力で、まず寝ている人間の胸の骨をぐつと押すと、骨は碎けてひと息に死んでしまう。それを易やすやす々と担いで行くんだということです。たといひと息に死に切らないものでも、その恐ろしい力で胸を押されて、もう半死半生になつた上に、かつて見たこともないような怪物が自分の上にのし掛かっているんですから、

大抵のものは異常の恐怖にとらわれて、もう声を出す元気もないだろうと思われれます。」と、高谷君は重ねて説明した。

「そうでしょう。しかし……。」と、丸山はまだ疑うように勇造の方を見返った。「我れわれもそう思ったもんですから、毎晩代るがわるに小屋の周囲を見廻つて、威嚇いかくにピストルを撃つたこともあります。猛獣は火を恐れるというので、所々に焚火をしたこともあります。それでもやつぱり無効でした。現に十二カ所も篝火かがりび火を焚いた晩に、日本人は攫つて行かれたんです。」

こうなると、高谷君の議論もよほど影の薄いものになつて来た。麻畑へ忍んでくる怪物は、野蛮人でも猿でもないらしかった。その次の問題は蟒蛇うわばみである。うわばみが這はい込んで来て、ひと息に呑んでしまうのではないかと考えたが、蛇も火を恐れる筈である。殊に夜なかに這い出して来るかどうか疑問であつた。鰐わにも陸おかへあがることがある。あるいは鰐ではないかという説も出たが、ここらの原住民は鰐に就いては非常に神経過敏であるから、その匂いだけでもすぐにそれと覺ることが出来る。原住民は決して鰐ではないと主張している。では大蜥蜴とかげかという説も出たが、とかげが人を喰おうとは思われない。たとい喰つたとしても、骨も残さずに呑み込んでしまう筈はない。結局それは野蛮人の仕業

であろうということになったが、丸山はまだそれを信じないらしかった。

「もしここらの森や山の蔭に、我れわれの知らない野蛮人が棲んでいても、原住民もかつてそんな人間らしいものを認めたことがないというんです。とにかく私も余り残念ですから、ほかの者だけを隣りの島へ泊りにやって、私とこの勇造のふたりだけは毎晩強情にこの小屋に残っているんですが、この二、三日はなんにも怪しい形跡も見えません。敵もこつちの油断を狙って来るらしいんですから、一度いたずらをするとう当分はやって来ないようです。そこで、こつちが少し安心すると、その油断を見て不意に襲って来る。いつもその手でやられるのですから、今夜あたりはもう油断ができませんよ。」

高谷君も一種の好奇心にそそられて、自分も今夜はこの小屋に泊って、その怪物の正体を見届けたいと思った。その話をするとう丸山も非常に喜んだ。

「どうかそうしてください。あなたも一緒にいて下されば、我れわれも大いに気丈夫です。あなたの御助力で、どうかこの怪物の正体を確かめたいものです。どうでお構い申すことは出来ませんが、あなたの寝道具ねどうぐぐらひはありますから。」

「どうで徹夜の考えですから、寝道具などはいりません。夜がふけると冷えるでしょうから、毛布が一枚あれば結構です。しかし私がいつまでも帰らないと、船の者が心配するで

しようから、誰か私の手紙をとどけてくれる者はありますまいか。」

「ええ、雑作ぞうさもありません。」と、丸山は勇造に言付けて、ひとりの原住民を呼ばせた。

手帳の紙片をひき裂いて、高谷君は万年筆でその用向きを書いた。原住民はそれを受取つて、すぐに小舟に乗つて使いに行くといつた。今夜ここに泊ると決定した以上、高谷君はその附近の地理をよく見さだめて置く必要があるのです、もう一度そこらを案内してくれまいかという、丸山はこころよく承知して一緒に出た。

空はまだ明るかった。貝殻の裏を覗のぞいたような白い大空が、この小さい島の上を弓形ゆみなりに掩おほつて、その処々に黄や紅の斑ふを打つたような小さい雲のかたまりが漂つていた。高谷君は今更のように、その美しい空の色どりを飽かずにながめた。麻畑のなかには大勢の日本人が原住民と入りまじつて、麻の葉を忙がしそうに刈つているのが見えた。かれらは大きい帽子をかぶっている、その顔はよく見えなかったが、おそらく夜の悪夢におそわれたような心持で、昼も仕事をつづけているのであろう。高谷君と丸山とのうしろには、かの勇造もついて来た。

「もう一つ判らないことがあるんですよ。」と、丸山は麻畑をぬけた時に言った。

三人の眼の前には大きい河が流れていた。その濁つた水が海へそそぐであろうと、高谷

君は想像した。低い堤に立つて見おろすと、流れはずいぶん急で、堤の赭土<sup>あかつち</sup>を食いかきながら、白く濁った泡をふいて轟々<sup>ごうごう</sup>と落ちて行つた。

丸山はステツキでその水を指さした。

「ごらんください。この河が境になつて、河むこうはあの通りの藪<sup>やぶ</sup>になつてゐるんです。怪物がもしあの藪から出て来るとすれば、どうしてもこの河を渡らなければならぬ訳ですが、ここを横切るといふことは容易じやあるまいと思われんです。人間は無論ですが、猿にしても蛇にしても、あるいは得<sup>えたい</sup>体の知れない猛獣にしても、この河を泳いでわたるのは大変でしょう。といつて、河のこつちはもうみんな開けてゐるので、なんにも棲んでゐる筈はありません。どう考えても怪物はその河むこうに棲んでゐるか、あるいは海の方から襲つて来るか、この二つよりほかにありませんが、もし海から襲つて来るとすれば、隣の島へも来そうなものです。しかし原住民の話によると、隣の島にはかつてそんな不思議はないということです。あなたのお考えで、この大きい河を渡つて来るような動物がありませんか。」

「さあ、なにしろ急流ですからね。」と、高谷君は怖ろしい秘密を包んでゐるような、濁つた水の流れを見つめていた。

三人はまた黙つて河上の方へ遡のぼつて行つた。空はまだ美しく輝いていたが、堤のあちらはもうそろそろ薄暗くなつて来た。水の音もだんだんに静かになつて来た。丸山は水を指さして、また説明した。

「ここから上流の方は水勢がよほど緩ゆるいんです。河底の勾こう配ばいにも因りましようが、もう一つには天然の堰せきが出来ているからです。」

ここらへ来ると、河底から大きい岩が突出していた。何百年来河上から流れてくる大木の幹や枝がその岩にせかれて重なり合つて、自然の堤を築いているので、そこには大きい湖みづうみ水みづのようなものを作つて、岸の方には名も知れない灌かん木ぼくや芦あしのたぐいが生い茂つていた。

「この通り、ここらは流れが緩いもんですから、みんなここへ来て水を汲んだり、洗濯物をしたりするのです。遠い昔から自然にこうなっているんでしようが、まことに都合よく出来ていますよ。」と、丸山は笑つた。「第一、下流の方は水が濁つていて、とても飲料にはなりませんからね。」

勇造は如才なくバケツを用意して来ていた。かれは灌木をくぐり水ぎわへ降りて、比較的比較的に清い水を一杯くんで来た。水の上はいよいよ薄暗くなつて、一種の霧のような冷たい



空気が芦の茂みから湧き出して来た。

「今夜も降るかも知れませんか。」と、勇造はバケツをさげながら空を仰いだ。三人の頭の上には、紫がかつた薄黒い雲の影がいつの間にか浮かんでいた。

「むむ、今夜も驟<sup>シヤワー</sup>雨かな。」と、丸山も空を見た。「しかし大したことはありませんよ。大抵一時間か二時間で晴れますよ。」と、かれは高谷君に言った。

それにしても驟雨が近づいたと聞いては、ここらにうろうろして居るわけにもいかないので、高谷君はもう小屋へ帰ろうと言った。

三人はもと来た堤をつたって麻畑へ出て、小屋の前へもどつてくると、大勢の労働者は仕事をしまつて、そこに整列していた。

「今夜も隣りへ行くのか。」と、丸山は笑いながら言った。

大勢は挨拶して河下の方へ降りて行った。さつきも話した通り、かれらは小舟でとなりの島へ泊りに行くのであると、丸山は高谷君にまた説明した。そうして、勇造に命じて夕飯の支度にかからせた。

日が暮れると果たして激しい驟雨がおそつて来た。その雨のひびきを聞きながら高谷君は夕飯を食った。

## 三

ここらの驟雨は内地人が想像するようなものではなかった。まるで大きい瀑布たきをならべたように一面にどうどうと落ちて来て、この小屋も押流されるかと危ぶまれた。雨の音はげしいので、とても談話などは出来なかつた。高谷君と丸山とはうす暗い部屋のなかに向い合つて、だまつて煙草をすつていた。テーブルの上には蠟燭ろうそくの火がぼんやりと照らしていたが、それも隙間すきまから吹き込んでくる飛沫しぶきに打たれて、幾たびか消えるので、丸山もしまいには面倒になつたらしく、消えたままに捨てて置いたので、小屋のなかは眞の闇になつてしまつた。ただ時どきに二人がするマッチの光りで、主人と客とが顔を見合せるだけであつた。

となりの部屋では勇造が夕飯のあと片付けをしているらしく、板羽目いたばめの隙間から蠟燭の火がちらちら揺らめいていたが、それもしまいには消えてしまつたらしい。雨は小やみなしに降つていた。

「随分ひどい。今夜はいつもより余ほど長いようだ。」と、暗いなかで丸山は言った。

高谷君はマツチをすつて懐中時計を照らしてみると、今夜はもう九時を過ぎていた。この暗い風雨の夜、しかも恐ろしい怪物があらわれるとかいうこの小屋に、丸山と勇造と自分とたつた三人が居残つただけで、小屋の内は愚か、この島じゆうに誰も人間らしいものは一人もいないのかと思うと、高谷君はいささか心寂しくなつて来た。そのおびえた魂をいよいよ脅かすように雷が激しく鳴り出した。

「雷が鳴れば、もうやがて止みます。」と、丸山は言った。

「この雨では怪物も出られませんまい。」

「そうです。ことに雷がこう激しく鳴つては、大抵の怪物も恐れて出ないかも知れません。」

雷はますます轟いて、真つ蒼な稲妻の光りが小屋のなかまで閃いて来た。その光りに照らされた丸山の顔はさながら怪物のようにも見られて、高谷君は薄気味悪くなった。ふたりはまた黙つてしまった。隣りの部屋も鎮まつていた。雨はそれから二時間ほども降りつづいて、しまいには小屋のなかまで流れ込んで来たらしい。高谷君の靴の先は濡れて冷たくなつて来た。雷は地ひびきがするほどに鳴った。

「あ。」と、丸山は突然に叫んだ。そうして、大きい声でつづけて呼んだ。「おい、勇造、

勇造……弥坂……弥坂……。どこへ行く。」

雷雨が激しいので、高谷君にはとても判らなかつたが、風雨に馴なれている丸山は勇造がどこかへ出て行く足音を聞きつけたと見える。かれは頻しきりに勇造の名を呼んだが、隣りではなんの返事もなかつた。

「この降るのに、どこかへ出たんですか。」と、高谷君は不安らしく訊いた。

「どうもそうらしい。」と、丸山は神経が亢こう奮ふんしたように言った。

かれは突然に起ち上がつてマッチの火をすりはじめた。高谷君も手伝つて、ようようのことで蠟燭に火をともした。

土間はもう三寸以上も雨水に浸されていた。ふたりはその水を渡りながら、蠟燭の火を消さないように保護してあるき出した。となりの部屋とのあいだには四尺ばかりの入口があつて、簾すだれ代りのアンペラが一枚垂れていた。そのアンペラをかかげて隣りの部屋を覗いてみると、果たしてそこには勇造の姿がみえなかつた。

「あ、やられたかな。」と、丸山は跳わたり上がつて叫んだ。その途端に蠟燭の火は消えてしまつた。

言い知れない恐怖に襲われながら、高谷君はあわててマッチをすつた。もう蠟燭をと

すのももどかしいので、二人はあらん限りのマッチをすって、そこらじゅうを照らしてみ  
たが、勇造の姿はどうしても見付からなかった。

「まだ遠くは行かない筈だ。」

丸山は衣兜かぶしからピストルを取出して表へ駈け出した。高谷君も用意のピストルをとって、  
つづいて駈け出した。しかしどっちへ行くという方角も立たないので、ふたりは雷雨のな  
かをうろうろしていると、蒼い稲妻がまた光って、その光りに照らされた麻畑のあいだに  
勇造のうしろ姿が見えた。ふたりは瀑布たきのような雨を衝いて麻畑のなかへまっしぐらに追  
って行った。稲妻が消えると、あとはもとの暗やみになってしまったので、二人は再び方  
角に迷ったが、勇造は堤の方へ行ったらしく思われたので、ふたりは頻りにその名を呼び  
つづけながら、麻畑を駈けぬけて河の岸へ出ると、雷はまた鳴った。稲妻もつづいて走っ  
た。その光りの下に勇造の姿がまたあらわれた。かれは堤から河の方へ降りて行くのであ  
る。

「弥坂君……勇造君……。」

「勇造……弥坂……。」

喉のどが裂けるほどに呼びながら、ふたりは堤から駈け降りようとすると、ぬれた草に滑つ

て丸山がまず転んだ。高谷君も転んだ。ふたりとも大きい蔓草つるくさに縋すがったので、幸いに河のなかへ滑り落ちるのを免かれたが、そのあいだに勇造の姿は見えなくなってしまった。それでもふたりは強情に彼の名を呼んで、びしょ濡れになってそこらを駈け廻ったが、どうしても彼のすがたは見付からなかった。

雷雨はそれから三十分ほどの後に晴れて、明るい月が水を照らした。ふたりは堤から麻畑を隈くまなく探してあるいたが、その結果は、いたずらに疲労を増すばかりであった。ふたりはもう我慢にも歩かれなくなつて、這はうようにして小屋に帰つて、そのまま寢床の上に倒れてしまった。

夜があけてから労働者が戻つて来た。かれらはゆうべの話をきいて蒼くなつた。大勢が手分けをして搜索に出たが、勇造の行くえはどうしても判らなかつた。いつまでもここに残っているわけにもいかないので、高谷君はその日の午後麻畑の小屋を出た。別れるとき丸山は言つた。

「もういけません。労働者たちはどうしても此処ここにいるのはいやだと言いますから、わたしも残念ながらこの島を立去つて隣りの島へ引移ります。弥坂は実に可哀そうなことをしました。しかしゆうべの出来事から、私はこういうことを初めて発見しました。怪物は猿

でもない、うわばみ蟒蛇へびでもない、野蛮人でもない。たしかに人間の眼には見えないものです。ピストルでもわな罫とでも捕ることの出来ないものです。眼に見えないその怪物に誘い出されて、みんなあの河へ吸い込まれてしまうのです。」

「私もそんなことだろうと思います。ほかの者がそう言うなら、あなたももう諦めてここをお立退きなすった方が安全でしょう。」と、高谷君も彼に注意した。

「ありがとうございます。そんなら御機嫌よろしゅう。」

「あなたも御機嫌よろしゅう。」

大勢は河の入口まで送つて来た。高谷君はもとのボートに乗って元船へ帰った。

この話のあとへ、高谷君は付け加えてこう言った。

「船へ帰ってからその話を見ると、船員も他の乗客も、みんな不思議がっているばかりで、何がなんだか判らない。船に乗組んでいる医師の見解では、この怪物はむろん動物でもない、人間でもない、一種の病氣——まあ、熱病のたぐい——だろうというんだ。さつきも話した通り、河上には流れのゆるい、みずうみ湖水のようなところがある。そこには灌木や芦のたぐいが繁っている。島にいるものは始終そこへ水をくみに行く。そこに一種のマラリヤ

熱のようなものが潜んでいて、蚊から伝染するか、あるいは自然に感染するか、どの道その熱病にかかると、人間の頭がおかしくなつて急に氣違ひのようになる。そうして自分から河へ身を投げるに相違ない、とこう言うんだ。なるほど、そんなことがあるかも知れない。それでまずひと通りの理屈はわかつたが、ただ判らないのは、どの人もみんな河へ飛び込むという事で、もし頭が変になつて自殺するならば、水へはまるには限るまい、なかには麻刈り鎌で自殺する者もありそんなものだが、みんな申し合せたようにその河に呑まれてしまう。それが僕にはまだ判らない。なんだかあのコーヒー色の水の底に、人間の知らない魔物でもひそんでいるんじゃないかとも疑われる。

医師はまたそのうたがいに對してこういう解釈を加えている。その患者は非常に熱が高くなつて、殆んどからだが焼けそうに熱くなるので、苦しまぎれに水に飛び込むのだろうと……。これも一つの理屈だが、理屈はまあどうにでも付くもので、なにしろ僕は南洋の麻畑に一夜をあかして、こんな怖ろしい目に逢つたということを話せばいいのだ。ドイツの小説の狸々ならば、またそれを退治する工夫もあるだろうが、眼にみえないものではどうにも仕方がない。果たしてそれが一種の病氣であるとしても、僕はやはり怖ろしい。君も勇氣があるなら一度あの島へ探検に出かけちゃあどうだね。」







# 青空文庫情報

底本：「鷺」光文社文庫、光文社

1990（平成2）年8月20日初版1刷発行

初出：「慈悲心鳥」国文堂書店

1920（大正9）年9月

入力：門田裕志、小林繁雄

校正：松永正敏

2006年10月31日作成

2007年9月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 麻畑の一夜

岡本綺堂

2020年 7月18日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>